

コロナ禍で浮かび上がった精神科病院の悲惨な実態

精神医療の“暗部”をえぐり出すドキュメンタリー

<https://bunshun.jp/articles/-/47761> 2021/08/06

水島 宏明（みずしま ひろあき）さん ジャーナリスト／上智大学文学部新聞学科教授。
札幌テレビで生活保護の矛盾を突くドキュメンタリー『母さんが死んだ』や准看護婦制度の問題点を問う『天使の矛盾』を制作。ロンドン、ベルリン特派員を歴任。日本テレビで「NNNドキュメント」ディレクターと「ズームイン！」解説キャスターを兼務。『ネットカフェ難民』の名づけ親として貧困問題や環境・原子力のドキュメンタリーを制作。芸術選奨・文部科学大臣賞受賞。
2012年から法政大学社会学部教授。2016年から上智大学文学部新聞学科教授（報道論）。放送批評誌「GALAC」編集長。近著に「内側から見たテレビやらせ・捏造・情報操作の構造―」（朝日新書）、「想像力欠如社会」（弘文堂）。1957年生まれ。東大卒。



2021年7月31日にNHK（Eテレ）が放送したETV特集「ドキュメント 精神科病院×新型コロナ」は驚きの連続だった。コロナ禍で追い詰められる精神科病院の内部で、カメラが医師や看護師、患者らを密着撮影した。ところが、その過程で「現代の日本で本当に起きていることなのか？」と思わず耳を疑いたくなるようなショッキングな現実が浮かび上がってくる。

取材班による撮影の現場は、病床数898床で全国最大の精神科病院の東京都立松沢病院。

昨年4月に新型コロナの専用病棟を設置して、精神疾患と新型コロナの両方の治療に取り組むなど先進的な精神科病院だ。精神科病院は、マスク着用を指示されても守ることができない患者もいるなどの理由で、一般の病院に比べ、新型コロナウイルスの感染防止策の徹底がより難しい。

「便がすごい…」。転院してきた患者たちの悲惨な状態

松沢病院は、他の精神科病院でクラスターが起きたときに新型コロナウイルスに感染している患者を受け入れることを決め、精神疾患のある患者たちが次々に転院してくる。

衝撃的だったのは、他の精神科病院から救急搬送されてくる患者たちの状況だ。大切に扱われていなかった感じが明白なのだ。おしりの骨の部分が壊死。床ずれが骨にまで達している。真っ赤な皮膚の下で筋肉が死んでいるなど悲惨な映像が映し出される。

患者本人や彼らがもともといた精神科病院の医療スタッフに聞いてみると、そこでは築60年以上の古い建物の畳敷の部屋に布団を並べ、大部屋に陽性の患者と陰性の患者を混在させたままでクラスターが発生していたことが判明した。

「物品も不足気味というかあまり揃っていない精神科特有の環境」なのだと医療スタッフは証言する。

2月にA病院（仮名）で起きた大規模クラスターで松沢病院に転院した患者の下半身を見たスタッフたちが思わず声を上げた。

「うわ、便がすごい」

「何日もおむつ替えていないんじゃない？」

排泄物の処理がなされていない。患者にインタビューすると、陽性患者を大部屋に集めて外から南京錠で鍵をかけていた実態が分かった。

「水！ 水！ 水！」などの阿鼻叫喚が響く地獄絵図

畳の部屋に布団を敷き、真ん中にポータブルトイレを置いて、全員がそこで排泄したという。カーテンや仕切りはなく「プライバシーは一切ない」と証言する。

「仕切りもないし、している音も聞こえるし、当然、トイレしたら臭いし、している間も臭まずいし」

看護師を呼ぶナースコールもなく、声を張り上げて絶叫する状態。

「水！ 水！ 水！」などの阿鼻叫喚が響く地獄絵図だ。

南京錠で閉鎖された大部屋で衆人環視の中の排泄。まるで江戸時代の座敷牢だ。「このまま死んじゃうんだな…」と絶望的な感情に陥ったと打ち明ける女性患者もいた。

A病院にはクラスター発生以降、保健所が複数回、感染症対策の指導に入った。しかし、保健所側は問題の大部屋を見なかったという。

実はA病院はクラスターの発生を公表していない。NHKがA病院に取材を申し込んでも回答はないまま。保健所も取材には「お答えできない」という反応だ。医療行政を束ねる

厚生労働省は、「患者の人権が損なわれることはあってはならない」と建前を語りながら「指導は都道府県が行う」と責任を転嫁する。

「『治ったら帰しましょう』だけで済む問題なの？」

A 病院には松沢病院も支援に入ったが、その報告会では医師たちが精神医療の現状をめぐる熱い議論を闘わせた。

「座敷に 6 人陽性患者を入れて鍵をかけている病院で、そこから普通に患者を受け取って『治ったら（元の病院に）帰しましょう』だけで済む問題なの？」（精神科部長）

「だけど精神科の病院が倒産していった患者さんが放り出されて、世の中はそれを受け入れる素地がないわけだから、その辺の塩梅を見ながらやっていかないと……」（病院長）

患者の人権を尊重するなら、A 病院にそのまま戻すのではなく、患者の処遇を変えさせる必要がある。だが、ひどい病院はここだけでないことも事実だ。病院を告発したら倒産に追い込みかねない。そうなれば患者たちはもっとひどい病院に行かされる可能性が出てくる。

病院を監督する東京都を取材すると、「指導した」と言いながらも詳細について回答を拒否する。

患者の証言では、A 病院での南京錠による隔離はその後も続いたという。ここでのクラスターで 115 人が感染し 6 人が死亡したが、病院も保健所も取材に答えようとしない。詳細を明らかにしない都を含め、感染防止を担う関係者の無責任な姿勢に不信感が募ってくる。

「ひずみは必ず脆弱な人のところに行く」

この番組は、都立松沢病院の院長だった齋藤正彦医師が取材を許可したことで実現したと思われる。齋藤氏は今年 3 月いっぱい院長を退き、現在は一医師として同病院の最前線で働くが、彼の考えが番組全体を貫く。

「この病院にコロナウイルスの感染のために送られてきた人は、社会的にすごくパワーのない人ばかりだった。守ってくれる家族もいないし、家もない。長いこと精神科の病院にいて、社会から全く根を切られちゃったというか」

「世の中に何か起きたときに、ひずみは必ず脆弱な人のところに行く」

「社会には弱い人がいて、僕らの社会はそれに対するセーフティーネットをどんどんどんどん細らせているのだということをもう一度思い出すべきなんだと僕は思う」

精神疾患の患者と向き合ってきた現場の医師の実感だ。

「世の中に何か起きたときに、ひずみは必ず脆弱な人のところに行く」という言葉は、報道機関で現場のジャーナリストが肝に銘ずべきとされてきた言葉とぴたりと重なり合う。現場の医師たちと現場のジャーナリストたちが重ねてきた実感を結実させたようなこの番組は、日本の精神医療の矛盾を浮かび上がらせ、テレビ報道の歴史を刻むものになった。

「転院」をターゲットにした見事な取材

制作した青山浩平氏は、「長すぎた入院 精神医療・知られざる実態」という番組で知られる。精神科病棟には曖昧な診断のまま長期入院する患者が少なくない実態をスクープ報道した（2018.2.3 放送）。

そのきっかけは、2011年3月の福島第一原発の事故だった。

原発近隣の精神科病棟から他の病院に「転院」を余儀なくされた患者たちに聞き取り取材をするうち、隔離収容する必要がないのに30年とか40年とか長期間入院し続けていた実態を明るみに出した。

今回、青山氏とペアを組んだ後輩ディレクターの持丸彰子氏が精力的に取材。一部の精神科病院で“人権侵害”と呼べる実態が今もあることを明らかにした。

新型コロナウイルスの感染拡大の状況で、原発事故と同様の「転院」が起きると予測して取材を進めたのだとしたら、取材者としての「読み」の深さに脱帽するしかない。

世界の精神医療は退院を促進する世界の動きを見せているのに、逆行する日本では精神科病院の入院患者はおよそ27万人もいる。多くの人が新型コロナに脆弱な環境にいると考えられている。家族も引き取らず社会の中で他に居場所がない精神疾患の患者たち。

番組を見ていない人のためにネタバレにならないように記すが、筆者と同世代で数十年も入院し続けてきた女性患者が、元の精神科病院に戻るときに口ずさむ小坂明子の往年のヒット曲「あなた」が胸に迫る場面がある。理屈だけでなく情感にも働きかけて共感しやすいヒューマンドキュメンタリーだ。日本社会の「かたち」についてこれでいいのかと問いかけてくる力作だ。

番組は、NHK オンデマンド <https://www.nhk-ondemand.jp/#/O/>でも視聴できる。